

ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler)

【選定理由】

尾張地方から三河地方に広く生息していたが、最近の記録を調べると、著しく減少しており、いずれの地域でも個体数は少ない。

【形態】

もっとも普遍的にみられるイチモンジセセリに一見類似する暗褐色のセセリチョウ。イチモンジセセリとは属も異なる。近縁種のチャバネセセリによく似ているが、後翅裏面中央の中室部に明瞭な銀白紋をもつことから容易に本種と同定できる。前翅にある♂の性標はチャバネセセリほど明瞭ではない。♀がやや大型、腹部が太いことを参考にして♂♀を区別する。春型は夏型に比しやや小さい。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市内（守山区、千種区、天白区、名東区）、犬山市、瀬戸市、春日井市、豊田市、新城市、北設楽郡（東栄町、豊根村）、豊橋市などから採集記録がある。名古屋市内でも同時に数頭が採集されるなど、かつては分布も広く、個体数も決して少なくないものと思われていた。近隣の岐阜県でも大垣市の標高 10m から、飛騨市（旧大野郡清見村）の標高 900m まで知られる。

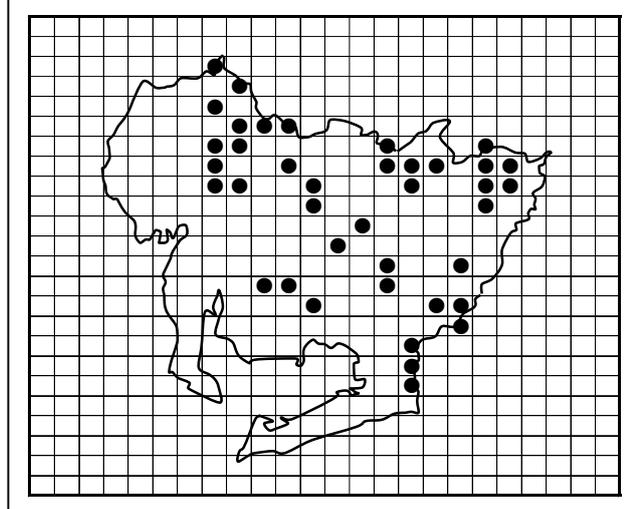
【国内の分布】

本州、四国、九州、に広く生息地が知られ、佐渡島、隠岐島、淡路島などの島嶼からも記録があるが、常に見られるといった生息地を聞かない。北限は青森県の竜飛岬、南限は鹿児島県佐多町と指宿市。海岸でも記録がある。垂直分布は 2,000m にも及ぶとされる。地理的分布は普遍的であるが、近年激減し、まれな種類となったと考えられる。

【世界の分布】

朝鮮半島から中国東北部にかけて生息する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本州中部の主な生息地は、標高 300~800m 付近の明るい草地である。広い草原には少なく、適度の起伏、水系、疎林、林道などが混在する草地を好む傾向が見られる。市街地の住宅の庭で発見されることもあり、コキマダラセセリのような草原性セセリチョウとは生息環境が異なる。

4~6 月と 7~8 月の年 2 回発生する。本種の幼虫の主な食草はススキやチガヤなどであり、これらも分布が広い。従って、本種の生息地の特性を明示することが難しい。成虫は多くの草花を訪れたり、地上で吸水したりする。飛び方はチャバネセセリやイチモンジセセリなどに比べ敏捷でない。

幼虫は食草の葉を筒状にした巣を造り、その中に潜んでいる。蛹化前に巣を離れ、食草の葉に窪みを作り、そこで蛹化するため、半裸の状態で見つかる。多くのセセリチョウが幼虫越冬であるのに対し、本種は蛹で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では近年の観察例が激減した。これは日本全国に共通する現象と思われるが、詳細については報告がない。生息地や食草は特定された条件が見出されず、減少の要因は気候の変化、酸性雨や農薬などの化学的要因などが示唆されるが、目下のところ不明としか言えない。

【保全上の留意点】

全国的に本種の生息状況を詳しく調べ、減少の要因を明らかにすることが根本的な保全に繋がるものと考えられる。農薬の散布に際しては、十分な配慮が必要である。

【関連文献】

高橋 昭・葛谷 健. 1956, 中部東海地方産蝶類目録第 3 報. 佳香蝶, 8 (29/30): 1-123.
福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑, (IV): 269-274. 保育社, 大阪.

(2009 年版を一部修正)